

# 經濟論叢

第八十卷 第六號

---

- フランス古典經濟学の系譜……………河野健二 1
- 貨幣需給の投資乗数効果に与える影響  
……………石川常雄 21
- ウィリアム・タムソンの經濟思想  
……………鎌田武治 39
- 英国労働組合の機構と形態……………与田 柁 55
- 經濟論叢 第七十九卷・第八十卷總目錄
- 

昭和三十三年十二月

京都大學經濟學會

## フランス古典経済学の系譜

河野 健 二

### 一

「古典経済学」というと、ひとは直ちにイギリスにおけるスミスや、リカードの経済学を思いうかべる。スミス、リカード、ミルなどに代表される経済学は、経済学にかかわりをもつすべての人間が、一度は通過しなければならぬ通用門のような位置を占めている。したがって、これらの経済学についての研究もまたいたって多ければかりでなく、研究それ自身が長い歴史をもっている。わが国においても、これらの経済学の研究史は、ゆうに半世紀をこえる尠大な蓄積となっており、そのことが新しく現在の研究者の関心のまともとなりつつある。しかし、やや問題をずらして、「古典経済学」は、母国イギリス以外のところでは、どのような現われ方をしたか、という点になると、それにしたがる答えは容易に一致点が得られない。というよりは、そうした設問の仕方が、これまでほとんどなされなかつたといつてよい。経済学の母国はイギリスであつて、それ以外の国の場合は、「古典経済学」とは質を異にする経済学、たとえばリストの経済学、ローマン派経済学、オーストリア学派、マルクス経済学等々というかたちで取り上げられてきた。つまり、「古典経済学」すなわちイギリス経済学という公式が存在していたのである。

わたしが、これから問題にしようとするのは、こうした従来の通念に反対して、イギリス以外の国（ここではフランス）においてもやはり「古典経済学」が存在することを明らかにし、そのことが経済学史、あるいは広く思想史の上でどのような意味ないしは役割をもつかを考ふる材料としたい。

ところで、フランス経済学の系譜を問題にする場合、イギリスにおけるのと同様に「古典経済学」の系統があることを明らかにしなければならないという問題関心を示したのは、私の独創ではない。他にもあるかも知れないが、最近こうした見解を呈示されたのは、内田義彦氏である。氏は『経済学の生誕』（昭和二八年）において、「ひろい意味において古典経済学はポアギューベル、ケネー、シスモンディに代表されるフランス古典経済学と、ペティ、スミス、リカードウによって代表されるイギリス古典経済学と、この二系列をふくむ」ことを指摘されたが、これは明らかに『経済学批判』のなかでのマルクスの指摘、つまり「イギリスではウイリアム・ペティ、フランスではポアギューベルに始まり、イギリスではリカード、フランスではシスモンディに終わるところの古典経済学」という見解を受けつぐものであった。このかぎりでは、周知のところであって、とり立てて論ずるには当たらないが、しかし内田氏は、右のような見解を氏のスミス研究のなかで具体的に提起することを試みられた。つまり、氏はイギリスのスミス（『国富論』）と、フランスのルソー（『不平等論』）とを対比させながら、この二つは一方では「原蕃國家からの解放」（スミス）、他方では「ブルジョアの所有権の確立」（ルソー）という異なつた課題を担いながら、しかもそれらが同時に現われてくる点に注目する。氏によれば、「ルソーおよびスミスの理論は、このような課題をふくみながら、破局に面した旧帝国主義に対するフランス、あるいはイギリス・ブルジョアジーの理論とみなければならぬ。」つまり、この両体系はイギリス、およびフランス資本主義の「型」と「段階」をめぐりに反映した

資本主義の理論であると説かれるのである。

内田氏の右の指摘は、非常に興味ぶかいもので(読者は直接、同書について検討されることを望む)、私のスミス理解をたしかに一步前進せしめたが、しかしルソーについては余り多くを言及されず、ただスミスとの関連という点で『不平等論』の内容分析を少しく試みられるにとどまった。したがって、氏の挙げるルソーがなぜ、いかなる程度において古典経済学者と呼ぶのにふさわしいか、については残念ながら多くを聞くことができない。ただししながら、ここで氏と共に確認しておきたい一二の点がある。それは、まず「古典経済学」とは何かという問題である。これについて、氏は「ブルジョアの歴史認識の基礎科学」が古典経済学であるという規定をあたえられる。歴史認識という表現は、やや誤解を招きやすいが、それは歴史論をもつということではなくて、社会体制、この場合はブルジョアジーによる市民社会認識の最高点にたつものが古典経済学であるという意味である。この点については、私は異論がない。古典経済学は、ブルジョアジーが到達した最高の社会認識であり、それを経済理論としかたちで結晶させたものであると思う。いま一つの点は、氏の挙げたルソーと関係するが、氏によると、ルソーは、彼をうけついだシスモンデイとともに、「ヨーロッパにおける近代思想の二大体系(すなわちローマン主義と合理主義)」の一方の系統、すなわちローマン主義の源流であると扱えられている。そして、この二つの体系は、対立するものであって、氏が適切にも挙げられた『資本論』の序文が示すところによると、「この十九世紀初頭におけるブルジョア経済学の古典派とローマン派の対立」が、ふたたびロシア革命の直前「九十年代におけるロシアの『合法的』マルクス主義者とナロードニキとの闘争において再生産された」とある。私は、この点をも氏とともに確認したい(一)念のため、つけ加えるが、右の二点を確認することは、わたしがルソーをフランスの古典経済学

者とする内田氏の考えに同意したことを決して意味しない。むしろその反対である。なぜなら、右の『資本論』序文の引用句も示すように、第二の論点は、ルソーおよびシモン・デイはブルジョア経済学の古典派ではなく、それと対立するローマン派にぞくすることが、あからさまに述べられている。この点とくに注意されたい。

- (1) 内田義彦『経済学の生誕』五〇頁、出口勇藏編『経済学史』一六頁。
- (2) マルクス『経済学批判』猪俣訳四〇頁。
- (3) 前掲『経済学の生誕』九〇頁。
- (4) 同九二頁。『資本論』長谷部訳一卷(一) 二二頁。

## 二

さきに進もう。ルソーをフランス古典経済学の代表者としてあつかおうとする内田氏の視角は、さいきん羽鳥卓也氏によってうけつがれ、「ルソー経済理論の構成」と題する一篇に結実した。この論文は、内田義彦編『古典経済学研究』上巻の巻頭をかざっている。私は前書同様、興味をもってこの一篇を読んだけど、その結果は、ルソーを古典経済学の枠のなかに入れることは、ますます工合が悪いという結論を得るだけにおわつた。その理由を以下に述べよう。

羽鳥氏の論文について指摘すべき点が多いが、まず氏の研究そのものについてよりも、研究の前提について述べることから始めたい。羽鳥氏の仕事は、全体としていうと、従来のルソー研究にたいして新しい視点を導入するという意気ごみに支えられたものだと思われるが、もしそうなら従来の研究のどの点が間違いであり、どこに欠点があるかを遠慮なく批判することから出発されるべきであった。従来の研究のなかには、貧しいながら私たちの書い

たルソー論(桑原武夫編『ルソー研究』・拙著『革命思想の形成』など)を含ませてもらってもよいと私は考えるが、そこにある見解には一言半句もふれないで仕事が進められていく。この点を私は残念に思った。同時に、このことは羽鳥氏の所論の狙いがどこにあるかを理解させることをかなり困難にしている。私たちは、ちがった意見の間の相互批判をもっと盛んにすることによって、学問の生産性を高めなければならないと思う(もつとも、ある種の文献をとり上げるか、無視するかは、執筆者の自由で、それを責めるわけにはゆかない。おそらく羽鳥氏は従来のわが國での仕事は、内田氏のものを除いて、すべて水準以下という判断に立たれたのであらう。それはそれで、一つの見識である)。

つぎに文献処理の問題がある。氏はルソーの経済理論をとり出す上で、『エミール』『新エロイズ』『コルシカ論』というように非常に広く文献を検討しておられ、この点で従来の研究にない視野の広さを獲得されたが、しかし右に挙げた作品は、いずれもルソーの社会科学の認識を示すものではなく、むしろルソーの他の一面、つまりルソーの個性や、想像力を示す系列の作品である。この二つは、人間ルソーのなかに、いわば矛盾的に併存しており、その関連を追求することは、それ自体きわめて興味ある主題であるが、しかし羽鳥氏がルソーの経済理論をこの後者の系列から引き出して、前者の系列、つまり『不平等論』『政治経済論』『社会契約論』に重点をおいていないことは、何としても重大な弱点であり、とくに『政治経済論』を理由を示さないうで全然、無視している点はまったく了解に苦しむざるを得ない。『政治経済論』は、内容的には政策論が中心であって、経済理論を展開したものではないけれども、しかしこれはルソーが経済問題に論及したほとんど唯一の文献である。そこでは、経済についてのルソー独特のとらえ方、すなわち経済を客観的な人間関係として理解するのではなくて、もっぱら政治ない

しは政策論として「政治経済」的に理解していること、さらに財産の不平等を是正して「中産階級」の平等社会を志向していること、少くともこの二点は明らかだと思ふ。これが何を意味するかについて、羽鳥氏は説明されるべきであつた。

そこで、論文の内容に入ろう。羽鳥氏の主張は真意を捕捉するのに、かなりの困難をともなうが、たとえば氏は結論的につぎのようについて。「古典経済学の成立を考へる場合、ルソーは重商主義や重農主義と並んで重要な位置を占めているのであるし、彼の経済理論に示されたヴィジヨンは重商主義の系列にも、また重農主義の系列にも含ましめてはならない固有のものを示しているのである。しかも、これこそが他のものよりもスミスの世界に最も近づいているのであるから、人は古典経済学成立史を論究する場合、従来のようにルソーを経済学者ではないと言つて片付けて素通りしてゆくことは許されないのである。」この主張のうち、ルソーを重商主義、重農主義のいずれにも属しないと見ることに、私も賛成であり、また経済学の成立史のうへでルソーの果たした貢献を認めることにも私は共鳴する。しかし、根本的な問題は、そのことの故に、ルソーを古典経済学の系列のなかで理解することが正しいかどうかということである。羽鳥氏は、この点について、積極的な論拠をどのように示しているであらうか。氏の論拠は、およそ二つである。その一つは、ルソーが彼の「歴史分析の基準としての」経済理論において、「社会における自然人」(主として自立農民のこと)が相互にとり結ぶ関係を「事實上資本主義的経済関係」であると認識していること。いま一つは、したがって、ルソーはそうした資本主義的経済関係の基礎概念である「利潤」「剰余労働」「資本蓄積」「再生産」などを、きわめて稚拙なかたちにおいてではあるが、つかんでいるということである。第一の論点は、おそらく前に述べた内田氏の視角をひききついでものであらう。わかりやすいと、ル

ソーは現実批判の基準として、自由で独立の生産者たちが併存する社会状態を構想しているが、この社会状態こそは「事実上資本主義的経済関係」に他ならないと羽鳥氏は考へる。この点は、大塚久雄氏をはじめとするわが国経済史学の基礎規角ともからまる重要な問題点であるが、一言で私の考へをいうと、自由で独立の商品生産者が併存する状態は、資本主義のための歴史的ならびに論理的前提ではあり得ても、資本主義そのものではあり得ない。この両者を無媒介につなぐというか、同一視するところに、従来の見解の主要な欠陥があつたと私は考へる。したがつて、「商業革命」も「原蓄」も「階級闘争」も、この視点からは脱落してしまふのである。ところで、ルソーはどうかというと、ルソーは自立的な生産者の世界と、彼のいう「文明社会」とを質的に異なるものとして構想している。この二つの世界の間に断絶があり、飛躍があることを彼はど力づよく主張したものは、あまり見当らない。しかし、古典経済学の場合は、どうだろうか。スミスでも、リカードでも、この二つの間に質的な変化を認めてゐるであろうか。答へは、おそらく否である。二つの世界の間は、連続的な進化の過程として、「事物の自然的秩序」の結果として、調和的にとらえられてゐるであろう。ブルジョアジーが自己の生い立つた過程を説明する場合、「暴力的な収奪」や「血なまぐさい搾取」をどうして持ち出すであろうか。「自然法則」の調和的發展ということ、これを説明するのがむしろ当然であろう。したがつて、ルソーが自由・独立の生産者の世界を構想したからといって、それが古典経済学的な思考方法であると断定することはできないばかりか、むしろ二つの世界の断絶をみているか否かという点に、古典経済学とルソーとの基礎規角のちがいを認めなければならぬ。

第二の点はどうか。「ルソーは事実上資本の蓄積と再生産の問題を取扱つてゐる」といふ<sup>9)</sup>、氏は小説『新エロイーズ』にえがかれたヴォルマール家の経営分析を試みられる。ここで前に述べた難点をくりかえすことになるが、

一体「新エロイーズ」は文学作品であり、ルソーのフィクションの産物である。そのなかに「利潤」や「資本蓄積」論があると仮定しても、それをもって著者の経済理論がこうだと断定するためには、よほどの慎重が必要である。たとえば、バルザックが株式について書いているからといって、バルザックを経済理論家とは誰もいわないであろう。まして、『新エロイーズ』に書かれたヴォルマルは、ルソーの執筆当時からルソー的でない人物という評価がされており、そのモデルはサン＝ランペールか、エルヴェシウスかなどと取沙汰されてきたといわれる。ヴォルマルは無神論的な傾向をもつ貴族であつて、ルソーの理想の人物からは遠い。しかし、その人物はルソーの世界観からいうと例外的とも、奇蹟的ともいえるような理想生活を営んでいる。その秘密はどこにあるか。これをルソーはヴォルマル家の生活事情を詳しく書くことで物語ろうとしたのである。ヴォルマルは大勢の召使いと日傭労働者をやとつて、領地を経営しているが、しかしそれは資本家的合理的経営というよりは、多分に自給的温情主義的経営である。「利潤」といっても、それは賃銀部分をこえる生産物量を意味するだけであつて、しかもそれはもっぱらヴォルマル家の生活資料にあてられる。ヴォルマルは、一般的な商品交換の世界に入りこむのではなくて、せいぜい自家生産物の物々交換を行うにすぎない。等価交換の世界や貨幣計算を前提としない経営について、「資本」とか「利潤」とかをせんさくしてみても、得るところは少ないといわざるを得ない。羽鳥氏も認めるように、ヴォルマル家について述べる場合でさえ、ルソーは価値論や労働価値論をまったく展開していない。わたしの見るところでは、ヴォルマルは半封建的な地主手作り経営の一例であつて、決して羽鳥氏のいうように「産業資本家」と見られるべきものではあり得ない。ルソーは、こうした地主経営が、主人公の美德と節約によつて理想的な生活をうち立てることができることを小説のなかで示したわけであるが、しかし彼が当時の現実のなか

でこうした経営があり得るとか、またこうした経営を普及させることで、現実の農民問題を解決することができるとか、考えていたとは到底うけとれない。すべては、フィクションの世界の出来事ではなかったからである。

- (1) 羽鳥卓也「ルソー経済理論の構成」(内田義彦編『古典経済学研究』上巻所収) 三六頁。
- (2) 同書五七頁。
- (3) 同書二五頁。
- (4) 桑原武夫編『ルソー研究』五七、三〇〇頁。
- (5) 『古典経済学研究』二九頁。

### 三

以上、私は内田氏のすぐれた着想と羽鳥氏の綿密な探求にもかかわらず、ルソーをフランス古典経済学の系統のなかに位置づけることができな理由を述べてきた。そこで、ではルソーの社会科学を一体どう理解すべきかという問題と、いま一つはフランス古典経済学の代表者は誰であるかという問題とが残されることとなる。ルソーをどう位置づけるかという点については、論じたことが多いが、本稿の性質上、さし当って私の旧稿を参照してもらうほかはない。簡単な定義だけを示しておくとしたら、ルソーは小ブルジョアの急進主義的思想家であって、古典経済学の系統とは明らかに別個の、それと対立するローマン派経済理論の代表者ということになろう。なぜ、そう考えるのかについては、別の機会にゆずって、つぎの問題、すなわち、ではフランス古典経済学の系統を誰れにおいて、いかなる作品のなかに見るか、という点にうつりたい。

私の説は、これまで述べてきたような新奇な説とはちがって、従来の経済学史での通説に近づくこととなるが、古典経済学の成立を基本的にはケネーからチュルゴーへの発展のなかでとらえようとするものである。ケネーから

チュルギーへの発展ということ、いつてしまえばそれだけの簡単なことでしかないが、しかしそこには多くの重要な問題が含まれているし、もともと資料的にも明らかにされていない点がすくぶる多い。なかでも、私が注目したのは、ケネーといい、チュルギーといつても、これらを孤立した一人の経済学者として見てきたこれまでの学史研究が、間違ひではないにしても、きわめて不十分なのであつて、ケネーにしろチュルギーにしろ、当時の思想、運動の代表者であつて、政治や経済との密接なつながりのなかで、それぞれの仕事をした人物だつたということである。ケネーを中心とする集団がフィジオクラートであつたことはよく知られているが、チュルギーの場合も当時の自由主義者の集団を代表するものであつた。フランスにおける古典経済学形成の問題は、こうした集団のイデオロギーや政治行動を分析することのなから、とらえ直すことが必要である。

もちろん「哲学者たち」の集団を固定的なものを見ることはできない。集団は時期によつて、また問題によつて、さまざまに組みまれ、また分裂したからである。たとえば、一七六〇年代のはじめ、ヴェルサイユ宮殿の中二階、ケネーの居室に出入した人々は、ケネーのほかにマルモンテル、グランベール、エルヴェシウス、ピッフオン、チュルギー、ル・メルシエ・ド・ラ・リヴィエール、コンディヤック、ボードー、デイドロなどがあり、アダム・スミスもまたイギリスからやつてきて、ここでケネーの影響をうけたのである。これらの人々をつらねて、ケネーを中心とするフィジオクラート、デイドロを中心とする百科全書派、それにチュルギーを中心とするエコノミストなどの集団が結集され、経済学の上での重要な諸作品、すなわち『百科全書』(一七五二—一七七二年)、ケネー『経済表』(一七五八年)、チュルギー『富の形成と分配に関する省察』(一七六七年)、ル・メルシエ『政治社会の自然的本質的秩序』(一七六七年)、コンディヤック『商業・政治論』(一七七六年)などが、スミスの『国富論』(一七七六年)以前

に、その影響とは無関係につくられたのである。

これらの作品のうち、真に古典経済学の名に値するものは、いうまでもなくテュルゴーの作品である。テュルゴーは、フィジオクラートがもっていた封建的・地主的色彩を一掃し、「土地」および「土地所有」にかえて「資本」と「労働」を、また「純生産」にかえて「剰余価値」を分析したことは、あまりにも有名であり、ここにはくり返さない。しかし、テュルゴーのこの作品だけではなく、『百科全書』への寄稿論文、彼が大臣として布告した勅令、書簡などを含めて、テュルゴーの仕事を全面的に検討し、評価することは、現在なお残された課題である。『テュルゴー全集』全九巻は、まだ未開拓の分野として、私たちの前にある。したがって本稿では、この点に深く立入ることができないことを告白しておかねばならない。

しかし、現在の研究水準においても、テュルゴーを古典経済学の系統に入れて理解することにさほど異論があるとも思われない。ただ問題はテュルゴーが、どのような思想集団を代表し、それがいかなる社会的役割をはたし、またそれがいかに受けつがれていったかという点にある。テュルゴーの理論的立場をはつきり特徴づけている点は、彼が経済学を「富が生産され、分配される諸法則」に關する科学であると規定し、こうした客観的で自然的な經濟過程に含まれる法則は、「私有財産の原則」、「労働の自由」、「独占・特権の廃止」、「協業」、「分業」、「技術改良」、「公共の安全」、「教育・道徳」などの諸原理であつて、これらの諸原理の帰結が徹底した經濟的自由主義（生産および通商の自由）の主張となつてゐる点である。それは、農業および農産物取引だけの自由という限定された、したがって原理的な一貫性をもたない重農主義の理論（それは当然、神秘化とセクト化を結果する）をこえたものである。いつて見れば、それは地主即資本家のイデオロギーではなく、それをも含めた資本家一般、産業資本を中核

とする資本主義社会の論理を表現したものに他ならない。チュルゴーは、フランス経済の当時の発展段階からいうと、全体としてまだ微弱であり、「産業革命」後をはじめて本格的となる経済関係を驚くべき炯眼さをもつて見ぬき、あらかじめそれに理論的な表現をあたえたものといえるだろう。

チュルゴーの立場は、現実の歴史のなかではフィジオクラートと入りまじりながら、多くのフィロゾフによってうけつがれた。コンドルセの多くの作品（たとえば『穀物商業に関する手紙』一七七五年、『小麦取引に関する省察』一七七六年、『奴隸制に関する省察』一七八一年）、ボンセルフの『封建的諸権利の弊害』（一七七六年）、『最も重要で緊急な問題あるいは農業および商業を復興する必要』（一七九〇年）、まゝに挙げたコンデイヤックの作品、デュボン・ド・ヌムールの『経済学の諸原理の合理的表式』（一七七三年）などは、いずれもチュルゴーの理論の適用であるか、あるいは彼の影響下で書かれたものである。

右に挙げた人々は、コンデイヤックを除いて、いずれもフランス革命のなかでかなり顕著な役割を果たした。このことは注目に値する。コンドルセの役割と彼の悲劇的な運命は、ひとの知るところであろう。彼は立法議会および国民公会において、ジロンドンの首脳の一入であった。ボンセルフは、立憲議会時代の著名な経済学者であり、デュボン立憲議会の議員であった。その他、恐怖政治によって殺害されたラボルジエ（『アッシニアに関する省察』）、ヴェルニオもチュルゴーの協力者であり、また弟子であった。このチュルゴーの系統の人々の特色は、いずれも立憲議会の間派、または右派であるか、あるいはジロンドンであつて、モンタニヤールではなく、モンタニヤールとは明確に対立し、モンタニヤール独裁の下では失脚するか、あるいは投獄、刑死という運命に出会つたことである。わが国では、モンタニヤールこそが真に資本主義のにない手であつたという「理論」が流行しているが、

真に資本主義的な理論の継承者たちは、見られるとおりモンタニヤール下では弾圧の対象となったのである（そしてモンタニヤールの理論的支柱こそルソーその人であった）。こうした事情は、エコノミスト達の理論と実践のくい違いの結果であろうか。私には、そうは思われない。むしろ、わが国の「理論」が歴史の現実とくい違つた結果が、ここに暴露されていると見るべきではないだろうか。

古典経済学の歴史において、フランス革命期は右に見た意味で大きな受難の時期であったが、しかしまたこの時期は古典経済学の一層の発展を準備した時期でもあつた。それは、フランス革命によつて、封建制、および封建的諸特権が一掃されたからであるが、経済理論の上に直接の貢献をもたらしたものは、何といつてもスミスの理論がフランスにもち込まれたことであろう。『国富論』のフランス語訳は、革命の前年に出版され、ガルニエ訳が出るのが一八〇二年であるが、それよりも重要なことは、立憲議会に属したレーデラー、およびジロンドンの指導者クラヴィエール、ブリッソーなどが直接スミスの理論から学び、それを実践に適用したことであろう。すなわち、レーデラーは立憲議会において議員の被選挙資格が争われたとき、それを一定の土地所有量にかかわらせようとするフィジオクラートの提案（地主国家への途）に反対して、動産の多寡によるべしとするブルジョア的な立場を主張し、ブリッソー、クラヴィエールは、重商主義的な保護関税政策に反対して、自由な貿易政策のためにたたかつた。かれらは、いずれもスミス理論の継承者であり、はつきりしたブルジョア自由主義の闘士であつた。

こうした事情を背景にして、チュルゴアの理論とスミスの理論との結合が実現された。フランス古典経済学は、この段階で完成したといつてよいであろう。しかし、その「完成」は二つの仕方になされる。その一つは、デスチュット・ド・トラッシンによつて、また、いま一つはジャン・バティスト・セーによつて。前者は古典経済学の体系

化を完成し、後者はいふまでもなく古典派経済学の「俗流化」を完成した。J・B・セーについては別として、ト  
 ラッシによる経済学の体系的完成という私の考えは、おそらく奇異の感じをあたえるであろう。そこで、以下トラ  
 ッシについて、輪郭だけでも示しておきた。

- (1) 拙稿「農民史におけるルソー」(桑原武夫編『ルソー研究』所収)。拙著『革命思想の形成』第一部。
- (2) Pierre Joly: Du Pent de Nemours. p. 16.
- (3) これまでの仕事のうち出口勇藏『経済学と歴史意識』、島恭彦『近世租税思想史』が注目される。なお桑原武夫篇『フラン  
 ス百科全書の研究』所収「百科全書の経済思想」参照。
- (4) Alfred Noyrnark: Turgot et ses doctrines. I. p. 330.
- (5) この点でコンダールセ、デュボン、ボンセルフなどをフィジオクライトとして無差別に一括してきた逆説は、訂正されなけれ  
 ばならない。

#### 四

トラッシ(一七五四—一八三六)は軍人貴族の家に生まれ、彼自身も軍人であったが、八九年の革命にさいして立  
 憲議会に入り、ラ・ロシュユフコー、ラ・ファイエットなどと共に貴族の改革派として活動した。軍人の経歴が買わ  
 れて、その後、国民衛兵の指揮官となったが、九二年八月十日の革命とともに隠退した。隠退後、猛然と哲学研究  
 にうちこみ、ピッフォン、ロック、コンデイヤックから多くを学んだ。しかし、モンタニヤール独裁の下で逮捕さ  
 れ、牢獄で死刑の日を待ちながら、自己の哲学体系を完成したといわれる。テルミドル以後、解放され、教育政  
 策の立案に参加した。一八〇一年に『イデオロギー原論』*Elements d'Idéologie*の第一巻を出版し、つづいて第二

卷『文法』、第三卷『論理』、第四・五卷『意志とその諸結果の綱要』を出した。経済学は、この四冊目の第一部をなしており、ふつう『経済学綱要』『Traité d'économie politique』と呼ばれている。

トラッシは、ブリュメール一八日の政変ではナポレオンを助けたが、ナポレオンの独裁化が始まると、彼と対立し、ナポレオンから軽蔑的に「イデオログ」の首領として目された。彼はナポレオン批判を意味する『法の精神の註解』を書き（一八〇七年）、これをひそかにジェファーンソンに托しているが、彼の『経済学綱要』もナポレオン没落後の一八一五年になって、やっと出版された。この時までには、すでにJ・B・セーの『経済学綱要』、シスモンディの『商業的富について』がいずれも出版されていたために（一八〇三年）、トラッシの仕事はとかく無視される結果になったのだと思われる（もつともリカードの『原理』（一八一七年）よりは早い）。しかし、彼の哲学がきわめて明快な「觀念分析」によって、感覺論的合理主義の極点を示すものであったのとひとしく、彼の経済学もやはり古典経済学の理論的体系化をなしとげた注目すべき業績であると思う（なお、マルクスは『剰余価値学説史』でかなり詳しくトラッシを扱っているが、その他の経済学史ではほとんどトラッシを問題にしていない）。

トラッシの経済分析の特徴は、厳密に定義された諸概念の必然的なつながりを追跡している点にある。最も一般的で単純な事実命題——「人間」および人間の「意志」——から出発して、高次の命題をつぎつぎに組みたててゆき、それによって複雑で具体的な経済問題を解明し、批判する法則をみちびき出す。なお彼は、「觀念分析」のそれぞれ段階で、事実による検証を織りこむことを忘れていない。こうした方法は、もちろん古典経済学が共通にとっている方法であるが、トラッシはこれを自覺的にとり上げ、厳密な規則にしたがわせたのである。まず、彼は「欲望」をもった自然的人間を前提して、その自然的傾向の所産として「社会」を考え、「社会」はそのすべての

成員のために不断に利益を増加させる「交換の無限の連続」から成っているとする。この交換社会の基礎にあるものは、事物に有用性をあたえるものとしての「生産」である。社会は有用な労働を行う「生産的階級」と、「生産階級」との二大階級からなる。生産的階級は、農業者をふくむ産業者と商人であり、フィジオクラートとは明確に対立する。生産的労働が「価値」のプリミティブな源泉であり（自然的・必然的価値）、その上に世論があたえる「人為的・契約的価値」がつけ加わる。「産業」は、こうした価値を増殖するために、事物の「形態変化」をなしとげるものであるが、そのためには「前貸し」が必要であり、これが「資本」である。資本は「利潤」を生むが、それは「報酬」ではなく、生産物の「有用性」の結果あたえられるものである。農業経営も利潤を生むが、それは工業経営には及ばないし、また農業者の利潤と地主の地代とを混同することも許されない。地代は利潤からの控除分であり、地主は金貸しと少しも異なるところのない「不生産階級」である。また、商業経営も有用なものであり、生産的であるが、しかし、国民は他国民の犠牲によってのみ利益をうるといふ説（国際的不等価交換説）は間違っている。——これらの見解がフィジオクラートおよび重商主義の理論にたいする正確な批判であることは明らかであろう。彼はフィジオクラートについて、「ひとがいつわりの原理から出発するとき、困難は山のように生まれてくる。おそろく、ここに、古い経済学者の著作のなかに見られる漠然とした、混乱した、ほとんど神秘的ともいえる用語法の大きな原因の一つがあるのである」と述べている。

さらに、トラッシンの論理を追っておこう。「貨幣」について、彼は貨幣（金属貨幣）をサインと見ることは誤まりであり、貨幣は他の商品と同じく一の商品であり、その価値の源泉は労働にあるとする。これに対して、紙幣はサインであり、紙幣をもつ政府は常に濫発にみちびかれやすいことを警告する。「あらゆる紙幣は、妄想にとりつ

かれた専制主義の気がいざたである」とするミラボールの言葉を彼は承認する。これは革命中のインフレーション政策に対する批判であると同時に、産業資本家の健康な要求をあらわすものであろう。つぎに、トラッスは「分配」論にうつる。彼は「生産」において増加した富が、「分配」においては平等な関係を結果しないことを認める。彼は人間の自然的な不平等を認め、「契約」によって不平等を是止しうるとするルソー的な発想をしりぞける。「個人の能力の自由な発現」と、「個人が自己の手段によって獲得しうるすべてのものを保障すること」とが、社会の基礎であるからだ。しかし、社会の階級を「土地所有者」と「非所有者」に分けることも、また「財産所有者」と「非所有者」に分けることも間違っている。なぜなら、いわゆる「非所有者」といえども、「人格」と「労働」と「労働賃銀」の所有者であるからだ。したがって、社会のすべての人間は、なんらかの意味での所有者である。これらの所有者は、賃銀取得者であるか、賃銀取得者を雇備する人間（資本家）であるかによって、二つにわかれる。つまり、資本家と労働者とである。この二つは異った利害をもつから、これは「現実的」な区別である。富の分配の歴史は、資本家の手に次第に富が集められ、貧困者が増加することは「不可避的」であることを示している。

ついで、トラッスは「人口」論に入り、人類は繁殖の自然的傾向をもつことを述べて、セーおよびマルサスの人口論に賛成する。注目されるのは、つぎにトラッスが階級論を展開していることである。さきに、トラッスは社会階級を「資本家」と「賃銀所得者」に二分していることを述べたが、その「資本家」を彼はさらに二つにわけ、その一つは「労働によらない所得によって生きる」「不生産階級」*oasis*であり、金利・地代・家賃取得者である。かれらは利潤をつくり出さないうで、利潤の控除分によって養われる。第二の人々は「なんらかの産業の企業者」であり、「利潤」を受取る。こうした分析から、彼の特有の「消費」論が出てくる。つまり、社会の一切の消費は、

生産的資本家 *capitalistes actifs* があたえるものであるという理論である。つまり、まず、賃銀労働者の消費源泉は、資本家のあたえる賃銀であり、また不生産的資本家の消費源泉である利子や地代も生産的資本家によってあたえられる。したがって、「産業企業者たちは真に政治体の心臓であり、かれらの資本はその血液である」こととなる。周知のように、マルクスはこのトラッシンの見解について、もし社会のすべての消費を資本家がまかなうとすれば、資本家は諸階級にあたえただけの消費源泉しか販売によってとり戻すことができずである。そうであるなら、資本家の利潤は一体どこから出てくるのか。トラッシンは明らかに混乱している、ということを描している。いうまでもなく、これはトラッシンが正しい意味での労働価値論、剰余労働および不変資本・可変資本の区別を知らなかったことの結果である。彼は、企業者の利潤を、生産費をこえての販売によって説明しようとするが、その利潤の源泉がどこにあるかを十分に発見することができていない。

さいごに、彼は政府の収入と支出を考察しているが、財政についての彼の一貫した立場は「廉価な政府」への要求である。彼は政府を「最大の消費者」として規定し、租税についても政府支出についても、一貫して消極的で批判的な態度をとる。そのさいの立論の基準は、生産的資本家の自由な活動こそが、一切の経済活動の基礎であるという考え方である。

- (1) *Nouveau dictionnaire d'Economie politique* (par L. Say) T. II, p. 1029.
- (2) マルクス『剰余価値学説史』一卷二六頁。久保田明光「ドメテヤット・ド・トラッシンの『観念学要論』に現れたる価値理論」(同氏著『現代フランス経済学』所収)は、わが国における数少ないすぐれた文献である。
- (3) *Destut de Tracy: Eléments d'Idéologie*, IV et V, p. 131.
- (4) *Ibid.*, p. 152. (5) *Ibid.*, p. 264.

(6) Ibid, p. 290. (7) Ibid, p. 338.

(8) マルクス前掲三六四頁以下。

## 五

以上、きわめて簡単にトラッシンの『経済学綱要』を紹介するにとどまったが、しかしこれだけでもトラッシンを「ブルジョアジーによる市民社会認識の最高点」に立つ一人とすることが必らずしも無理でない所以を明らかにし得たかと思う。おそらく、J・B・セーの理論との比較が問題として残ると思われるが、しかし、たとえば「利潤」を資本家の「報酬」とし、「利潤」と「利子」を混同し、地主と農業資本家を同一視し、「非物質的資本」という概念を導入し、資本と労働との調和を説き、労働価値説を否認し、労働者の窮乏を認めないといったいわゆるセーの「俗流性」を想い起すならば、トラッシンをセーと同一視することは明らかに不当であろう。その上、トラッシンはロック、コンディヤック、チェルゴーという明らかに近代的な「哲学」および科学方法をひきついでている。この故に、古典経済学のフランス的形態として、トラッシンをとり上げることが、これまで彼が無視されてきただけに一層、必要なことであると私は考える。

しかし、トラッシンの時代は、前にも述べたように古典派経済学の終末の時期であった。一方では、J・B・セーによる弁護論的経済学がつくられ、他方ではシスマンデイによるローマン派経済学が発見された。ブルジョアジーによる科学的認識は、客観性を失って、主観的観念論におちこむか、または通俗的な表象をかき集めるだけのものとなった。同時に、このとき、資本主義の諸矛盾に主観的に反撥する小ブルジョア的、ローマン的経済学が現われ、

小市民の共感を博したこともまた偶然ではない。わたしが前に見たトラッシの理論のなかにも、こうした時代的狀況はやはり影をおとしてゐる。それはトラッシの階級論、分配論、人口論のなかにある暗さ（と呼んでもいいだろう）とかかわりをもっている。トラッシは、セーのような楽観主義にはすでに安住できないのである。

古典経済学は、もはやその使命を果しおわたつたのであろうか。理論的にはそうだといえるだろう。しかし、現実的にはそうではない。トラッシが政界に復帰するためには、一八三〇年の七月革命を必要としたように、ブルジョアジーが真に支配する社会は、「産業革命」が制覇し、地主や小ブルジョアジーを資本の法則に全面的にしたがわせることなしには、実現されなかつた。古典派経済学がえがいた経済の見取り図は、約半世紀のあいだの試練を経て、十九世紀の中期にやっと現実のものとなつた。そして、そのとき、すべての人が認めるように、マルクス経済学がはじめてその適用の地盤を現実社会のなかに見出したのである。

(一九五七・一〇・七)

あとがき——本稿は人文科学研究所西洋部における「フランス革命の共同研究」に多くを負う。しかし責任は、もとよりわたし一人にある。